

書 評 と 紹 介

ケイト・ムーア著
／松永典子・山口菜穂子・杉本裕代訳

『働いて愛して生きるために 女たちは闘わなければ ならない』

——ラジウム・ガールズ
のアメリカ』

評者：藤川 賢



ラジウムを含む夜光塗料を時計の文字盤などに塗装する作業に従事して被ばくした「ラジウム・ガールズ」の存在は、放射線リスク管理の出発点として知られている。たとえば中川保雄の『放射線被曝の歴史』では、1928年に「国際X線およびラジウム防護諮問委員会」(IXRPC)が設立された契機として、放射線医療にかかわる医師・技師・患者と並んで、ラジウム・ガールズが重要だったことを挙げている。

「時計の文字盤に夜光塗料を塗り付けたアメリカの女子労働者の間では、骨肉腫や再生不良性貧血で生命を失う人たちが、1924年頃から続出した。それは、アメリカの労働者や公衆衛生局が全国的調査を行わざるをえないほどの大きな社会問題となった」(中川 2011: 33-34)

その後の放射線への規制が順調に進んだわけではないことを知りつつも、私は、当時のアメリカ社会がこの女性たち被害を深刻に受け止めたと思い込んでいた。だが、本書を読んでそれがいかに浅はかであったかを痛感し、恥じ入っ

ている。彼女たちの被害は、その大きさにもかかわらず隠され、否定されたのであり、彼女たちは被害を受けた後も闘わなければならなかったのだ。

ラジウム・ガールズたちの闘い

彼女たちの多くは南欧などからの移民の系譜をもつ労働者階級の出身で、10代のうちから文字盤塗装の仕事に携わっていた。そして、早ければ1～数年のうちに身体の変調に見舞われるようになった。Mullner (1999) によれば、ニュージャージー、コネティカット、イリノイの3州で、1912～1946年に働いていた数千人のうち、112人がラジウムに関連して亡くなったと確認されている。

本書はその女性たちの活動を描いたドキュメントであり、徹底的な資料収集と家族や子孫などからのヒアリングに基づき、数十人の登場人物たちの言動を丁寧に記述している。主な舞台は、ニュージャージー州の小都市ニューアークと、イリノイ州の小さな町オタワである。ニューアークには1916年に(翌年近隣のオレンジに拡大移転)、オタワには1922年に、文字盤塗装の工房(スタジオ)が開設された。モダンな職場、技量を要する作業、高めの歩合給の新しい仕事は、彼女たちにとって魅力にあふれていた。自ら収入を得ることの喜び、同僚たちとの楽しい時間、さまざまな家族の形、恋愛や結婚への憧れなど、本書は、古き良き時代のアメリカの様子を描いた小説のような描写から幕を開ける。

だが、活力に満ちた毎日の中で、1920年代に入るとすぐに身体的な異変が現われる。放射線障害は晩発性と言われるが、筆先を口元で湿

らせて細くするリップ・ポインティングと呼ばれる手順などによって多くのラジウムを取り込んだ若い女性たちには、短期間でも歯、顎、足などにおける異変が生じた。当初、その数はわずかである。だが少しずつ広まり、複数の女性たちに苦痛と不安、そして医療費などの経済的な負担や社会的な圧力などが押し寄せる。

塗装工房への疑いは徐々に色濃くなるが、会社側はそれを否定し、医療費補償なども拒否する。それに対して、訴訟などで闘い続ける女性たちが存在した。彼女たちの強さと思慮深さ、友情と団結力が、本書の主題である。医師や弁護士の助けも得られない状況で、だが、文字通り最後の力を振り絞って支援者を探し、証言台に立つ女性たちの姿は心を打つ。彼女たちが賠償を求めたのは、自分たちのためではなく、残された家族や、次に続く人たちのためであった。1928年6月、ニュージャージー州の訴訟でようやく和解にいたったグレース・フライヤーは、こう語る。

「私が気にしているのは、私自身のことではありません。いま考えているのは……」「今回の件が先例になりそうな、ほかの何百人もの女工たちのことです」「お分かりでしょうか。まだ分からないだけで、私たちと同じような方が、もっとたくさんいるのではないのでしょうか……」(290頁)

だが、最初の和解はすべての問題の解決にはまったくならなかった。和解に応じざるを得なかった米国ラジウム社は、フライヤーたち数名に続いて1名の和解に際して、これらの訴訟を支えていた弁護士に対する条項を加え、今後は米国ラジウム社にかかわる一切の訴訟に関与せず、かつ情報や資料の提供も行なわないことに同意させた。以後ニューアークでの動きは沈滞する。

そして、オタワで文字盤塗装を行なうラジウ

ム・ダイヤル社は、ニュージャージー州での和解の3日後に「検査結果では、同社ではラジウム中毒は観察されない」などの全面広告を地元紙に出す。すでにオタワでも健康不良の労働者が出現し始めており、広告の翌日にはその最初の犠牲者遺族から訴訟を起こされるにもかかわらず、会社はそれらを見做したのである。地域も会社の主張に同調し、多くの従業員が安心して働き続けた。身体を壊した女性たちは健康診断の対象から外され、やがて会社からも追われることになる。

その一人であるキャサリン・ウルフ・ドノヒューを主要当事者とする訴訟において、彼女が勝訴するのは1938年4月であった(会社側が控訴をくり返したため連邦最高裁での勝訴確定は、彼女の死後の1939年10月)。さらに、ラジウム・ダイヤル社は1937年に、1万ドル(執筆時点の価値で16万4595ドル)の社債を残してイリノイ州から姿を消したため、キャサリン・ドノヒューとともに闘った仲間や、その後続いた女性たちが受け取った補償額は数百ドルにとどまる。

彼女たちの前に立ちはだかるもの

ニュージャージー州での訴訟ではラジウム中毒をめぐる因果関係が主要な論点となったのに対して、イリノイ州では毒性の認識や時効にかかわる労災補償の法制度などが大きな争点になった。このように、被害女性たちの救済を妨げたものは一つではない。それらは、組織の問題、法律の限界、科学技術と社会の関係、ジェンダーや階級にかかわる差別意識など、複数の側面をもつ。

この点で本書が重要なのは、多様な関係者一人一人の言動を詳述することで、その複雑さを解きほぐしていることである。未知の病気に戸惑う医師たち、みずからの責任を認めずに営業

の継続と利益だけを求め続ける企業、官僚的な対応をくり返す行政や司法の当局。それらに対して、彼女たちを支えようとする人たちもいる。それらの動きが個人名で語られる。資料に残された記述がそのまま引用される部分も多い。時には「詐欺師のなかの詐欺師」（消費者連盟によるフリン博士への評、230頁）のような露骨な評価も現われる。

中でも興味深い人物の一人が、ラジウム盤塗の創始者で米国ラジウム社の創立者でもあるフォン・ソチョッキーである。彼は、キュリー夫妻のもとで学んだこともあって早くからラジウムの危険性を知り、自身でもそれによる傷害を受けていた。1918年にはグレース・フライヤーがリップ・ポインティングをしているのを見て、「そんなことをしてはいけないよ」「病気になってしまうよ」と注意したこともある（29頁）。彼女たちが病気になってからも、呼吸から人体のラジウム線量を計測する技術などに貢献する。だが、1928年に証言台に立った時には、10年前の注意は記憶にないといい、仮に注意していたとしてもラジウムの毒性を認識していたからではないと否定した。この時点でフォン・ソチョッキーが米国ラジウム社から追放されていたこと、ラジウム中毒のために半年後に亡くなることなどを考えあわせると、彼の揺らぎは何によるものか、証言台では何を思っていたのか、悩ましい。

彼の揺らぎは、当時の制度や社会的意識とも結びついているだろう。1935年にニュージャージー州で起こされたアイリーン・ラ・ポルテの死に対する訴訟の判決において、判事は次のように述べた。

「今日では、当時の（同社が）用いた産業的手法は単に怠慢だけでなく犯罪である。しかし、注意を払うべきは、本件が、その手法が存在していた1917年時点での知識の観点から決

定しなければならないということである。……裁判所は、本件のような事例が予見できなかったときの要求を満たす法を改正する権限を持たない」（384頁）

結果として、時効に相当する出訴期限法によってこの提訴は棄却され、ニュージャージー州の女工たちへの正義は閉ざされたのである。そして、これとは対称的に、1932年3月30日に有名な実業家エベン・バイヤーズがラジウム水「ラディトール」を原因とするラジウム中毒で死亡した時には、関係各部署は迅速に対応した。

「1931年12月、連邦取引委員会はラディトールの販売停止命令を出し、米国食品医薬品局もラジウム医薬品を違法と宣言した。そして、米国医師会は、ラジウムの内服液を「新・非公式治療法」のリストから外した。文字盤塗装工の死が判明してもリストから外すことはなかったのに。労働者階級の女工たちよりも、裕福な消費者のほうが、よほど保護する価値があるかのようにだった。そもそも1933年になっても文字盤塗装作業は続けられていたのだ」（345頁）

つけ加えれば、リップ・ポインティングはなくなるもののラジウムによる文字盤塗装は1980年頃まで続き、スーパーファンドサイトに指定された工場跡地の汚染は本書執筆時点まで残っている。これについて、本書に先行してラジウム・リスクの歴史とラジウム・ガールズについて解説したMullner（1999）は、「半減期が1600年のラジウムを1年か2年しかもたない時計の文字盤に利用したのは馬鹿げていた」と、短期的な消費によって未来世代に負荷を残したことの浅慮さを指摘している（Mullner 1999: 143）。だが、半減期2万4千年のプルトニウム239や半減期7億年のウラン235が一瞬で消費される核兵器や発電に使われ続けていることを考えると、現代の私たちは、その浅慮さ

を笑えないだろう。ラジウム・ガールズから社会が学んだことは何だったのか、私たちが見落としてきたものの大きさを改めて感じざるを得ない。

その後の放射線防護との関係

IXRPC は、「耐用線量」として、1934 年に 1 日 7 時間、週 5 日労働の「正常な健康状態にある人が耐えうる X 線被曝線量として 1 日あたり 0.2 レントゲン」という勧告を出した。アメリカの委員会はこれを 0.1 レントゲンに引き下げ、この基準がマンハッタン計画による原爆開発にも適用された（中川 2011：27）。レントゲンとシーベルトとは質的に異なる単位なので単純に換算できないが、1 レントゲンを 10mSv 相当と想定すると、1930 年代の「耐用線量」は年間 350 ～ 700mSv に相当することになる。

マンハッタン計画におけるプルトニウム生産拠点のハンフォードサイトでは、確かに遠隔操作の機械などが導入され、労働者の健診なども行なわれたが、労働災害も、サイト内外での放射能汚染も多発した（ブラウン 2016 など参照）。そして、ラジウム・ガールズへの検診と同様、マンハッタン計画でも放射能に関する検診結果やプルトニウムの危険性が労働者本人に知らされることはなかった。

第二次大戦後の原水爆実験に関しても、ストロンチウム 90 の長期リスクを調査するためにラジウム・ガールズの協力が求められた。米国原子力委員会によって「人体放射線生物学センター（Center for Human Radiobiology）」が組織され、1993 年のプログラム終了までに、5,650 人の文字盤塗装工を確認、うち 1,934 人のラジウム蓄積量が測られた（Mullner 1999：138）。その記録は長く生存した人も含めてラジウムの影響が大きいことを示し（486 頁）、研究が「少なくとも部分的には貢献したことによって」

1963 年には部分的核実験禁止条約が調印された（479 頁）。だが、やはり調査結果が彼女たちに共有されることはなかった（480 頁）。

放射能の安全基準や労働安全衛生法など、彼女たちの貢献によって生まれたものは多い。数多くの調査や研究を受けて、ラジウム・ガールズの時代に比べて今日では放射線防護の基準もはるかに厳しくなっている。だが、実際のところ、何が、何を守るために、どう貢献したのかは不明のままなのである。安全に関する議論や不安は、福島原発事故後に年間 1mSv か 5 年間 100mSv かが問われた時も似たように存在した。原因不明の被害や不安にどう対応するか、という点ではラジウム・ガールズをめぐる状況と福島原発事故後の日本の間での共通点も少なくない。

日本での経験と共感可能性

現代の日本との関連で言えば、訳者代表の松永典子氏は、著者がラジウム・ガールズによる「国家への貢献」の中に原爆（とそれによるアメリカの勝利）を加えることに、「日本人として」疑問を呈している。

「放射線の被害に苦しんだ彼女たちが、原爆の投下によってもたらされた被爆者に目を向けず、自分たちは国家のために役立ったと喜んだのだろうか。私はそう思わない」（520 頁）

アメリカでは、第一次大戦での国防における夜光塗料と同様に、原爆も第二次大戦における勝利と平和に貢献したという言葉が根強いことを考えれば、彼女たちがこの疑問にどう答えたかは分からない。だが、被ばく者たちの苦しみや、その人たちに関する医学情報が彼女たちについての情報とともに戦後の放射線基準の議論に使われたこと、その議論が平和と安全よりも軍需や企業利益を優先する方向に進んだことなどを知れば、彼女たちの判断も変わってくるに

違う。

この点は松永氏が「日本人として」と書いたことに通じる。アメリカでは第二次大戦後に放射能による後遺症などに関する報道が規制され、原爆の被害はあたかも短期間のものとして語られることもあるが、日本では被ばく者の長期にわたる苦しみ語り継がれてきた。福島原発事故後にも同様の長期的不安がある。だから「日本人として」として、とも言えるのだが、とはいえ、ひとたび記憶に刻まれたものは永続すると認識共有を過信することもできない。本書のエピローグで「生き延びた文字盤塗装工たちは安泰ではなかった」(485頁)と、悲劇の継続が示されるのは、アメリカ社会でラジウム・ガールズが過去のことにされることへの警鐘だろうが、それは日本における広島・長崎や福島での経験にも通じるだろう。

忘却を防ぐために

本書の「あとがき」は、「私たちはなんと忘れやすいのだろうか」と結ばれている。私たちが忘れやすいからこそ本書を執筆したという著者の思いを反映しているようにも見える。

この点では、本書が英米でベストセラーとなった背景にトランプ大統領（第一次政権）やイギリスのEU脱退などに見られる「ポスト・トゥルース」があるという訳者の松永氏の指摘に深く首肯した(517頁)。事実が個人的意見や感情より低く評価される傾向は、私たちに多

くのことは見失い、忘れることを強いている。そう考えた時、本書で描かれるラジウム・ガールズの勇気と思いやりで満ちた行動が生き活きと書かれ、私たちの共感を呼び起こす意味が改めて浮かび上がる。

ラジウム・ガールズの経験は、その成果だけでなく、それを得るための彼女たちの苦闘と努力、そして、その背後で救済されなかった多くの悲劇とともにある。その中で困難に立ち向かった彼女たちの姿を知ることは、彼女たちの犠牲的な経験による科学的成果以上に、意義深く感じられる。福島原発事故の記憶さえ風化が指摘されて久しい今日、忘却を防ぐために彼女たちから学ぶべきものは多い。

(ケイト・ムーア著／松永典子、山口菜穂子、杉本裕代訳『働いて愛して生きるために女たちは闘わなければならない——ラジウム・ガールズのアメリカ』堀之内出版、2025年3月、XXIX + 539頁、定価：本体3,600円＋税)

(ふじかわ・けん 明治学院大学社会学部教授)

【参考文献】

- 中川保雄(2011[1991])『〈増補〉放射線被曝の歴史——アメリカ原爆開発から福島原発事故まで』明石書店
- ブラウン、ケイト(2016[2013])『ブルートピア——原子力村が生みだす悲劇の連鎖』(高山祥子訳)講談社
- Mullner, Ross (1999) *Deadly Glow : The Radium Dial Worker Tragedy*, American Public Health Association.